

看話禅における禅定の一樣態

——大慧宗杲の「壁観」理解を通して——

廣 田 宗 玄

一 はじめに

「壁観」は、ダルマの教説の一つであり、曇林「略弁大乘入道四行論序」・ダルマ『二入四行論』に見える言葉である。このダルマの「壁観」は、後に道宣（五九六―六六七）による『続高僧伝』菩提達磨章に「虚宗」と表現され、「大乘壁観、功業最高」（T五〇―五九六C）と評価される。本論はその壁観の理解を通して、大慧宗杲（二〇八九―一二六三）の看話禅の坐禅観の一端について検討したい。

二 壁観の理解の推移

壁観について具体的にその性質を定義したものととして、圭峰宗密（七八〇―八四二）による「外止諸縁、内心無喘、心如牆壁、可以入道」（鎌田茂雄『禅源諸詮集都序』・禅の語録九・筑摩書房・一九七九年・一一六頁）が挙げられる。これは、諸縁を断ち切り、「喘ぐ」心を制御し、「牆壁」の如き無心を実現す

ることによって入道すべきことを述べている。つまりこれは禅定について述べたものであると言えよう。

やがて宋代に入る頃には壁観は「面壁」の意に解され、「心如牆壁」という心境の譬喩が、身体の相に重点を置いたものへと変化する。『景德伝灯録』卷三・菩提達磨章に「寓止于嵩山少林寺、面壁而坐、終日默然、人莫之測。謂之壁観婆羅門」（T五一―二一九b）とあるのがその代表的なものである。

一体、「壁観」中の「壁」の解釈は古来様々であるが、それが宗密以前は心境の譬喩であったことは「心如牆壁」とあることから明白であろう。それが壁を見る「面壁」という坐相の意味と解されることにも一定の意味があることについては既に先学の指摘があるが⁽¹⁾、しかし、宋代に入る頃にこのような解釈が現われたこと、さらにその後は「壁観〓面壁」との理解に偏向するようになったことについては注意する必要がある。

三 大慧の「壁観」理解

そのような時代背景をうけて、大慧は壁観について次のように述べる。

昔達磨謂二祖曰、汝但外息諸緣、内心無喘、心如牆壁、可以入道。二祖種種說心說性、俱不契。……彦冲云、夜夢昼思、十年之間、未能全克。或端坐靜默、一空其心、使慮無所緣、事無所託、頗覺輕安。讀至此不覺失笑。何故、既慮無所緣、豈非達磨所謂内心無喘乎。事無所託、豈非達磨所謂外息諸緣乎。二祖初不識達磨所示方便、將謂外息諸緣、内心無喘、可以說心說性、說道說理、引文字証拠、欲求印可。所以達磨一一列下。無處用心、方始退步、思量心如牆壁之語、非達磨実法、忽然於牆壁上、頓息諸緣。即時見月亡指、便道、了了常知故、言之不可及。此語亦是臨時被達磨拶出底消息、亦非二祖実法也(答劉宝学書・T四七―九二五b)。

ここで大慧は後に嗣法の弟子となる劉彦冲(劉屏山・一一〇―一二四七)が黙照禪に陥っていることへの注意を促すために、ダルマの「壁観」を取りあげて説示する。当時の坐禪が面壁であったことは大慧自身「雖然不許默照、須要人面壁」(T四七―八二八b)と述べていることから理解出来るが、ここで大慧は敢えてそのことには触れず、「牆壁」(という言葉)を工夫することによって悟りに到るべきことを主張する。

また大慧は別の箇所でもより詳細に「壁観」について述べて

いる。

昔達磨謂二祖曰、汝但外息諸緣、内心無喘、心如牆壁、可以入道。二祖種種說心說性、引文字作証、並不契達磨意。前所云忘懷著意、正謂此也。若不著意則諸緣息矣、若不忘懷、則内心定矣。内心定、則自然与牆壁無殊、亦不著將心安排計度、然後得如牆壁也。但只就疑不破處參。參時切忌將心等悟。若將心等悟、則没交涉矣。生死心未破、則全体是一团疑情。只就疑情窟裏、拳箇話頭。僧問趙州、狗子還有仏性也無。州云、無。行住坐臥、不得間斷。妄念起時、亦不得將心遏捺。但只拳此話頭。要靜坐、纔覺昏沈、便抖擻精神拳此話。忽地如瞎老婆吹火和眉毛眼睫一時燒了。不是差事。得如此了、忘懷也得、著意也得、靜也得、鬧也得。雖全体在輪回中、亦不被輪回所轉、借輪回為遊戲之場。得到這箇田地、亦不著將心和會、自然成一片矣(四卷本『普說』卷四・示王通判大任・典籍叢刊・三一七b)。

ここで大慧は、著意・忘懷のそれぞれをダルマの壁観に当てはめて説く。著意しなければ「諸緣息」、忘懷しなければ「内心定」とし、その両者を離れて「心如牆壁」の境地に到るべきことを強調する。

著意と忘懷とは禪病のことであるが、これについて大慧は「錢計議請普說」中に於いて「若不著意便是忘懷。忘懷則墮在黒山下鬼窟裏、教中謂之昏沈。著意則心識紛飛、一念統一念、前念未止後念相統。教中謂之掉拳。不知有人人脚跟下不沈、不掉底一段大事因縁」(T四七―八八四c)と述べ、これ

らが掉挙・昏沈と言ひ換えられ、この両者を離れた先に「一大事」の存することを述べる。昏・掉の両者から離れることによつて心の平静を得るということは、インド以来の基本的な禅定法であるが、大慧の主張は全く異なる。大慧は著意・忘懐の克服の為には、端的に生死がうち破れぬ心、つまり「疑團」の中に没入し、一心に話頭工夫すべきことを述べるのである。そして四威儀の全てに涉つてそのような工夫を続ければやがて頓悟に到り、著意・忘懐はおろか、日常のあらゆる様相を受容して自在なることが出来るのだというのである。このことは、無字の工夫が一種の禅定法であることを示している。しかもそのような禅定が、決して静処に限定されるのではなく、むしろその当初より行住坐臥の四威儀中に修されるべきことを説く点に無字の工夫の特徴があるのである。更にその工夫について別の箇所で、「你、塞却眼耳鼻舌身意、如木頭忪相似」（四卷本『普説』卷一・淨恭園頭請普説・典籍叢刊・一六九a）と述べて、見聞覚知の働きを止めて無心を実現すべきと述べる。これは壁觀の「外息諸縁、内心無喘」の様態について具体的に述べたものと言え、また一見黙照禅と共通する点ともとれるが、黙照禅がそこに留まることを主張するのに対し、大慧は更に話頭の工夫によつて「悟」を実現すべきを主張することは、先の彦沖に対する説示に見える通りである。

看話禅における禅定の一様態（廣 田）

四 まとめ

大慧の壁觀の主張は、一方で面壁坐禅でありながら、その本質は話頭の工夫である。しかも、それは「但於日用心縁不味、則日月浸久、自然打成一片」（T四七―八九九a）と主張し、更に「必須於熾然生滅之中、驀地一跳跳出」（答富枢密書・T四七―九二二a）と述べて日常の煩雑な場所で工夫すべきことを強調する大慧にとつて、静処よりもむしろ動処に於いて為すべきことにその禅定觀の特色がある。大慧の壁觀の主張はその具体性の表明であり、黙照禅をはじめとする「悟」を無視し、静処での坐に偏向する禅風に対する反定立でもあったのである。そしてそれは六祖慧能（六三八―七二三）・荷沢神会（六八四―七五八）に始まり、「有一般瞎禿子、飽喫飯了、便坐禅觀行、把捉念漏、不令放起、厭喧求静、是外道法」（T四七―四九九b）と主張する臨濟義玄（？―八六七）の坐禅觀を正しく引くものであったと言えよう。

1 石井公成「石壁を通りぬける習禅者と壁に描かれた絵―壁觀の原義について」（『仏教学』三十七・一九九五年）他。

2 柳田聖山・椎名宏雄共編『禅学典籍叢刊』卷四所収・四卷本『大慧普説』・臨川書店。

（キーワード） 大慧宗杲、壁觀、無字、看話禅

（禅文化研究所研究員・文博）